Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-16

ライフサイクル第9段階の適応としての「老年的超越」-奄美群島超高齢者の実態調査からの考察-

冨澤，公子

(Citation)
神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要,2(2):111-119

(Issue Date)
2009-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81001022

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001022

神戸大学大学院人間発達環境学研究科
研究紀要第２巻第２号　2009

研究論文

ライフサイクル第９段階の適応としての「老年的超越」
－奄美群島超高齢者の実態調査からの考察－

Gerotranscendence as an adjustment outcome in the ninth stage of life cycle:
A case study of the oldest old in the Amami Archipelago

冨　澤　公　子*
Kimiko　TOMIZAWA

要約：本研究の目的は、ライフサイクルの第９段階の適応課題とされる「老年的超越」（Gerotranscendence）の形成について、奄美群島超高齢者を対象とし調査から明らかにすることであった。その結果、奄美群島超高齢者は暮らし向き、生活満足感、地域愛着度が高く、日常行動は多様で楽しみごとも多く、老いた感はあるが孤独感、無視、余計者と感じる割合は低く、健康状態が普通以上の人は百歳を目指し、生きた証を子や孫に残したいなど、前向きでポジティブな生があった。その背景には馴染んだ生活環境からくる隣人、家族らに対する信頼感の高さが上げられる。これらからはErikson の示唆する基本的信頼感が超高齢期を生きる力であることの実証がされた。一方、「老年的超越」の回答からは各項目の認識度の高さが示され、因子分析の結果からは、「宇宙的超越」、「自我超越」、「執着超越」からなる３因子が導かれた。重回帰分析の結果からは、「宇宙的超越」は老い感が高く、行動能力が高くなると低下すること、「執着超越」は自立度が低くなると低下するなどの関連が明らかにされた。「老年的超越」は年齢とともに高次に至るというわけではないが、第９段階をサクセスフルに生きるうえでの適応課題であることや地域の癒しの効用が示唆された。

１　問題の所在と研究の目的

85 歳以上の超高齢者（oldest old）層の人口増加が先進諸国共通の現象となっている。既に日本人女性の平均寿命は 85.59 歳（2005）と超高齢者の域に達しており、将来人口においては高齢者人口に占める超高齢者の割合は、現在の約 10％から 2030 年には 23％を上回ると予想されている（2006）。人類未到の長寿社会を実現し、超高齢期という新しいライフステージを迎えることとなった今日、超高齢期特有の課題を明確化し、超高齢期におけるサクセスフル・エイジングの実現に向けた環境づくりが求められているといえる。

しかしながら、超高齢期を新たにフォースエイジ（Fourth Age）と捉えたBaltes ら（2002）のベルリン加齢研究所（Berlin A ging Study）などのデータからは、超高齢者の約 80％は多重障害を経験しており、90 歳代では約半数の人に何らかの痴呆症状が認められ、新たなことの学習に関連する認知機能面の低下、満足感の低下、孤独感の増加などの状態が示されたとする（Baltes & Smith,2002）。これらの結果から彼らは、サードエイジ（young　old）の高齢者はサクセスフルな年齢を重ねることに成功した世代、フォースエイジ（oldest　old）の超高齢者は人間としての尊厳を保つことが困難となる世代と論じ、超高齢期のサクセスフル・エイジングには否定的である（Baltes & Smith，2002）。超高齢者の認知機能を概観した権藤は、生物学的、社会的加齢が同時に起こるのが超高齢期の特徴であると指摘する（2002）。

一方で、ネガティブでは捉えられない超高齢者の出現がある（冨澤 ,2007）。内閣府が毎年紹介する年齢にとらわれず自由で生き生きとした生活を送るエイジレス・ライフ実践者には、超高齢期にも新たなことに挑戦し活動する超高齢者が登場し、これらの事例からはエイジングによる衰退より生涯発達のエネルギーの存在を感じさせる。また、超高齢者の身体機能と心理的適応の関連を調べた研究からは、客観的機能側面の低下にかかわらず主観的幸福感は低下しないことが確認され、超高齢期は主観的心理側面に影響する要因が前期・後期高齢者と異なることが示唆される（権藤，2005）。

このようななかで超高齢者に関する研究は、認知機能の特徴（岩佐ら ,2005）、人格の特徴（下中，2002）など個人のエイジングに着目した客観的機能分析が主流で、心理学的視点からの実証研究は少ない状況が指摘される（佐藤，2003）。加えて、長い生活歴のなかで形成される人生観やスピリチュアリティなどの内面（精神）世界

*　神戸大学大学院総合人間科学研究科博士課程後期課程

（2008年９月１日　受付
2009年１月16日　受理）

に焦点を当てた研究は超高齢期までは明らかにされていない(高橋, 2004；武田, 2002)。超高齢期／超高齢者の生の全体的な理解に至るにはまだまだ未解明な部分が多いといえる。

そこで本稿では、超高齢者理解を Erikson と Tornstam の論考にある Gerotranscendence（老年的超越）理論に求め、超高齢期の適応について考察しようとするものである。Erikson ら（Erikson & Erikson）は、「一握りの「長老」から大量の「年長者」集団としての超高齢者の増大」を質的変化としてとらえる（1997)。彼らは自らが超高齢期に至って、この期特有の課題を明確化することが不可欠であるとし、生涯発達の視点からライフサイクルに第９段階目の超高齢期を設定し、この期の適応課題として「老年的超越」[1]（Gerotranscendence）の概念を提示した。彼らは、超高齢期は多くの新たな困難や喪失体験、身近な人々の死に遭遇し、自分自身の死の扉がそう遠くないことを感じるに至るが、これらの喪失を生き抜く確固とした足場として、人生の出発点で獲得した基本的信頼感という恵みが人には与えられていると論じる。そして、第９段階のさまざまな失調要素を甘受することができる人は、「老年的超越」に向かう道に前進すると示唆するのである（1997)。

Erikson（Erikson.J.M, 1997）が提示した「老年的超越」は、スウェーデンの社会学者である Tornstam（Tornstam.L）によって作られたギリシャ語の geron ＜老人＞と英語の transcendence ＜超越＞の造語である。高齢期の適応理論であった離脱理論を再定式化して、高齢期の生活満足の問題を物質的・合理的な観点から宇宙的・超越的な観点へのメタ・パースペクティブな変化ととらえ、エイジングに伴う世界観や自己態度の発達変容を高齢期における新たな適応とする理論である（Tornstam , 1989)。彼は「老年的超越」理論について、高齢者一般に対するネガティブな感覚（惨め、孤独、衰退）や過度な期待感（役割期待、資源性）と実際の高齢者の思い（孤独ではない、高い生活満足度、高齢期の発達）との認識のズレ、ミスマッチから出発していると説明する。つまり、我々が高齢者に対し「ネガティブで社会からの離脱」と簡単に決めつけてしまうものは、実は「老年的超越へと向かうポジティブな発達である」ことに注目すべきであると主張するのである（Tornstam, 2005)。

Tornstam 理論を紹介した中嶌・小田（2001）は、サクセスフル・エイジングを考える上で「老年的超越」理論の有用性を示唆している。また柴田（2007）はサクセスフル・エイジングとスピリチュアリティの視点から、増井（2008）は超高齢期の人格発達と適応の視点から「老年的超越」理論を紹介している。 Braam ら（2006）は、「老年的超越」理論は高齢期の成熟と心理発達を説明する上で高い概念であると述べているが、実証研究で明らかにされたものは非常に少ない状況にあると指摘する。

Tornstam はインタビュー調査の結果を基に作成した「老年的超越」尺度を用いて量的研究を重ね、「老年的超越」を構成する次元として、万物の魂や宇宙との親交の感覚の増大としての「宇宙的」次元、自己中心性の減少や自己超越などの「自己（内的一貫性）」次元、表面的な関心の減少や一人を望むなどの「社会と個人の関係（積極的な孤独）」の３つの次元や徴候を導き出されている（1996；2003)。その結果、宇宙的超越の兆候は成人期の中頃から年齢と共に増大し高齢期に最大の発達を迎えること、孤独を望む兆候は高齢期に最大を迎えるが、しかし成人期の前期にもっとも急激に発達すること、内的一貫性の兆候は青年期でスタートし、75-85 歳で最大を迎えその後は平行に推移すること、などの兆候を明らかにしている（2003)。しかし、高齢者を対象とした老年的超越の形成は北欧を中心に実証されたもので、日本での実証研究は少ない。

本稿では、生涯発達の視点から第９段階に到達した超高齢者の適応課題としての老年的超越の形成について、普通の老いの過程にある奄美群島[2]の超高齢者を対象とした調査を通じ、次のような４つの点を明らかにすることを目的としている。

第１は、普通の老いの過程にある自宅居住者の超高齢者の生の実態を明らかにすること。第２に、超高齢期の内面（精神）世界の形成について、「老年的超越」尺度を用いて明らかにすること、第３に、第１と第２の結果から超高齢期のサクセスフル・エイジングについて明らかにすること。第４に、これらを通し、近代化がおしなべてステレオタイプなイメージを作り上げてしまった老いに対する偏見や差別（嵯峨座 ,2000）に対し、新たな知見を提示することである。

なお、奄美群島を選定する理由は、当地域は泉重千代さん、本郷かまとさんなど長寿者を輩出した長寿の島であり、現在全国の先進的長寿モデルとして「あまみ長寿・子宝プロジェクト」が展開しているところである。人口10万人当たりの百寿者の割合（粗百寿者率）は 66.06 人（平成 15 年度）と沖縄県（42.49 人）より高い地域であり、サクセスフル･エイジングの統合概念である長命、健康、生活満足･幸福の３つの要素（小田, 2004）からみて、超高齢社会を先取りしているという点で今後の示唆が得られると考える。また、個人のライフサイクルは社会的文脈と切り離しては理解できないという視点（Erkson, 1997）からは、奄美群島の超高齢者は戦争中空爆投下から壊滅的な被害を受け、また終戦前後８年間は米国軍直轄下での辛酸な生活を体験するなど、奇跡的に生き残った人たちである（薗, 2000)。さまざまな危機体験をもつ奄美群島の超高齢者は生きる意味を深く考える契機と経験を有しており、超高齢期の内面性（深層心理）を解明するに適した対象と選んだものである。

２．方法

1）データ収集と対象者

住民基本台帳から奄美群島内の２町村において自宅に居住する 85 歳以上の超高齢者（2006 年２月現在）に対し質問紙を郵送するアンケート調査を実施した。調査対象数はＵ村の自宅居住超高齢者全員 105 人を対象とした。Ｔ町は自宅居住超高齢者総数 502 人の半数の 251 人を対象とした。回答者は 102 人（回答率 28.7％）であった。調査期間は４月～８月で実施した。

なお、調査票への回答は本人以外でもよく本人以外の場合は家族かその他の者かの記入区分を設けた。

2）倫理的配慮

回答者のプライバシー保護に関する誓約を郵送時に添付し、調査以外の目的で使用しない旨誓約し、データは適切に管理している。

3）質問紙の構成及び分析データ

本調査で用いた質問紙は、基本属性、行動能力、心理的適応（生活満足感、愛着度、時間認識、長生き観、現在の心境、楽しみごと）、老い観及び老年的超越に関する質問項目から構成した。分析は SPSS で行った。

4）データの内容

① 基本属性

性別、年齢、居住年数、家族構成の項目は該当を○又は数字で、暮らし向きは「大変苦しい（1点）」から「大変余裕がある（5点）」までの5件法、健康状態は「元気（4点）」から「寝たきり（1点）」の4件法、医者に「かかっている（0点）」、「かかっていない（1点）」、介護認定は「認定外（0点）」から「要介護5（6点）」までの7件法で回答を求めた。

② 行動能力

行動能力は、老研式活動能力指標13項目で「はい（1点）」「いいえ（0点）」を用いた。また具体的な行動内容を把握するため、1週間で行った仕事や活動として、「収入のある仕事」「畑や山の手入れ」、「魚・海草採り」、「食事の支度」、「部屋の掃除」、「洗濯」、「買い物」、孫やひ孫の世話」、「店番・留守番」、「庭の手入れ」、「郵便局」、「ボランティア」、「何もしなかった」など、13項目を例示し、選択回答可で尋ねた。

③ 心理的適応

心理的適応の尺度として、現在の生活満足度は「大変満足（5点）」から「不満（1点）」までの5件法、地域愛着度は「感じる（2点）」、「感じない（0点）」、「どちらともいえない（1点）」の3件法、時間認識は、「来週」、「来月」、「1年後」の3区分から予定があるかどうかを、「はい（1点）」、「いいえ（0点）」で回答を求めた。

長生き観は、まず、長生きの秘訣について、「健康に気をつける」、「食べ物に気をつける」、「身体を動かす」、「規則正しい生活」、「楽天的な性格」、「前向きな性格」、「趣味がある」、「家族が大事にしてくれる」、「気分が若い」、「やる仕事がある」「生きがいがある」、「その他」の12項目を例示して複数回答可で尋ねた。

また、あと何年くらい生きたいかを「希望年数の記入」、「百歳は生きたい」、「もう十分生きた」、「寿命がくるまで」「その他」の5項目で尋ねた。さらに、あなたの長生きをもっとも喜んでいるのは誰かを、「自分自身」、「家族・親戚」、「亡くなった両親・兄弟」、「友人・知人・近所の人」、「その他」の5項目で尋ねた。日中の楽しみごとは、「テレビ・ラジオ」、「新聞」、「読書」、「デイサービス」、「病院・リハビリ」、「おしゃべり」、「散歩」、「ゲートボールなどスポーツ」、「カラオケ」、「趣味」、「講演会・観劇」、「その他」、「楽しみ事はない」などの13項目から複数回答可とした。

また現在の心境について、「この年になるともう勉強することはない」、「いつまでも人に頼らないで生きていこう」、「以前ほど自分をまじめだと思わない」、「同年齢の人と比べ元気な方」、「もっと世の中の動きや新しいことを知りたい」「若い人が希望すれば経験談を話してもよい」、「もっと新しい出会いや新しい人間関係をつくりたい」、「何ができることがあれば社会の役に立ちたい」、「生きた証を子や孫に残したい」などの9項目について「そう思う」、「思わない」の2件法で尋ねた。

④老い観

老い観はTornstamの憂鬱尺度5項目の日本語訳から、「孤独だと感じる」、「時間の経過が遅い」、「無視されている」、「余計者と感じる」、「老いたと感じる」から、「はい（1点）」、「いいえ（0点）」で尋ねた。

⑤老年的超越項目

老年的超越の尺度は、Tornstamの「老年的超越」の認識上の兆候・次元の特徴（Tornstam, 1987）から日本語訳の11項目を尺度として作成した。①「表面的なつきあいへの関心がなくなった」②「物やお金に対する興味がなくなった」③「若いときには気づかなかったささやかなことにも幸せを感じる」④「自分は何かに生かされていると感じることがある」⑤「自分のいい面も悪い面も全てを受け入れられるようになった」⑥「物思いにふけることに幸せを感じるようになった」⑦「過去の出来事がつい最近のように感じることがある」⑧「離れた所にいる兄弟や子どもを近くに感じることがある」⑨「亡くなった両親や祖父母への愛情が増してきた」⑩「死に対する恐怖心がなくなった」⑪「若いときに比べ心が穏やかになった」の11項目であり、「はい（1点）」、「いいえ（0点）」の2件法で尋ねた。

3．結果

1）対象者の特徴

対象者の特徴は表1のとおりである。年齢は85歳から101歳までの幅があり、平均値は90.00 ± 3.95歳。最頻値86歳であり、86歳～88歳の年齢層に回答者全体の40%が占める。性別の割合は男性34.3%、女性65.7%である。調査票の記入者は本人41.1%（39人）、家族48.4%（46人）、その他10.5%（10人）である。家族構成は「1人」が39.4%（39人）で、次いで「2人」28.3%（28人）である。1人暮らしの内訳は男性15.4%（6人）、女性84.6%（33人）であった。居住年数の平均は71. 6年で、中央値は80年。暮らし向きは、「普通」が6割（60.6%）で、「ややゆとり」「ゆとりがある」をあわせると、84.9%となる。健康状況は、「元気」と「普通」が全体の8割という状況にある。介護認定の状況では、「認定者」52.9%、「認定外」47.1%で、若干認定者が上回るものの、介護度の重度の者は少ない状況にあった。

表1　対象者の特徴

項目		人数	割合(%)
年齢	平均	90 ± 3.95歳	
	最頻値	86歳（年齢幅85歳～101歳）	
性別	男	35	34.3
	女	67	65.7
家族構成	1人	39	39.4
	2人	28	28.3
	3人	22	22.2
	その他	10	11.0
居住年数	平均	71.6年	
	中央値	80年	
暮らし	大変苦しい／苦しい	15	15.2
	普通	60	60.6
	ややゆとり／ゆとり	24	24.3
医者	かかっている	72	75
	かかっていない	24	25
健康状態	元気	40	40
	普通	40	40
	寝込み	9	9
	寝たきり	11	11
介護認定	認定外	48	47.1
	要支援	13	12.7
	要介護1	22	21.6
	要介護2	8	7.8
	要介護3	1	1.0
	要介護4	7	6.9
	要介護5	2	2.0
記入者	本人	39	41.1
	家族	46	48.4
	その他	10	10.5

2）行動能力の状況

日常の行動能力（老研式活動能力指標 13 項目）の回答状況は表 2-1 のとおりであった。0-1 点に全体の２割、12-13 点に全体の２割と２極化傾向を示している。平均点数は 6.41 であった。また、ここ１週間の間で行った仕事や活動の状況は表 2-2 である。洗濯（52.0%）、庭の手入れ（44.1%）、食事の支度（43.1%）、掃除（38.2%）、買い物（33.3%）、郵便局（27.5%）と回答は多様であった。一方で、孫の世話（6.9%）、店番・留守番（3.9%）は低かった。

表2-1　行動能力（老研式活動能力指標得点）

得点	人数	割合 (%)
0	10	10
1	10	10
2	11	11
3	3	3
4	3	3
5	9	9
6	4	4
7	6	6
8	7	7
9	5	5
10	8	8
11	4	4
12	8	8
13	12	12

＊得点平均　６．４１

表 2-2　ここ１週間で行った仕事や活動

項　　目	人数	割合 (%)
掃除	39	38.2
洗濯	53	52.0
買い物	34	33.3
孫の世話	7	6.9
店番・留守番	4	3.9
庭の手入れ	45	44.1
郵便局に行った	28	27.5
ボランティア	13	12.6
畑の手入れ	33	32.0
仕事（現金収入）	6	5.9
魚採り	4	3.9
食事の支度	44	43.1

3）心理的適応状況

心理的適応状況について、現在の「生活満足度」を尋ねたところ、「大変満足」と「満足」を含めた「満足」は 47.3%、「普通」は 46.1%で、全体の 93.4%が普通以上と回答し、「やや不満」、「不満」は 6.6%と低かった。また、地域に愛着を感じるかどうかでは、「感じる」が 93.7%という状況にあった。（表 3-1）。

表 3-1　心理的適応状況（満足度・愛着感）

項　　目		人　数	割合 (%)
生活満足度	大変満足	12	13.2
	満足	31	34.1
	普通	42	46.1
	やや不満足・不満足	6	6.6
地域愛着度	感じる	90	93.7
	どちらでもない	6	6.3
	感じない	0	0

次に、生活時間についての認識の程度を「来週」、「来月」、「1 年後」の３区分の予定で尋ねたところ、結果は表 3-2 のとおりであった。「来週の予定」は 6 割（56.6%）、「来月の予定」4 割（40.7%）、「1 年後の予定」は 3 割（28.4%）と、時間経過とともに生活時間の予定が低下していく。

表 3-2　生活時間認識

項　　目		人　数	割合 (%)
時間感覚	来週の予定あり	47	56.6
	来月の予定あり	33	40.7
	来年の予定あり	23	28.4

長生き観について、３つの項目で尋ねた結果は表 3-3 のとおりである。何歳まで生きたいについては、「寿命が来るまで」が 48 人（54.5%）、「百歳」は 22 人（25.0%）で、「もう十分生きた」という消極派は 5.7%であった。なお、100 歳を超えて生きたいとする人も数人いた。長生きの希望と健康状況との関連をみてみる（図 1）と、「百歳」と回答した人の健康状態は「元気」か「普通以上」の人であり、「寿命が来るまで」の回答は、「元気」から「寝たきり」までさまざまであった。

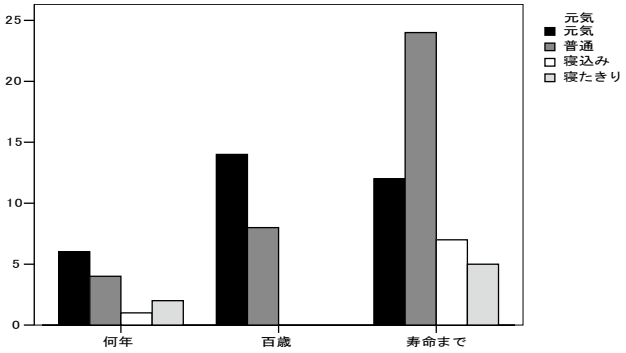

図１　健康状態と長生きの目標

次に、あなたの長生きをもっとも喜んでくれる人を尋ねたところ、「家族・親戚」が 7 割（68.2%）、「自分自身」が 3 割（29.5%）で、「家族・親戚」が喜んでいるとの回答が圧倒的に多かった。また、長生きの秘訣については、「健康に気をつける」、「家族が大事にしてくれること」、「身体を動かすこと」がともに 63 人（61.8%）で 6 割を超え、次いで「食べ物に気をつけること」が 60 人（58.8%）であった。ここでも、長生きにおける家族の存在の大きさが伺える。

表 3-3　長生き観

項　　目		人数	割合（%）
何歳まで	寿命がくるまで	48	54.5
	百歳まで	22	25.0
	もう十分生きた	5	5.7
	その他	13	14.8
長生きを喜んくれる人	自分自身	26	29.5
	家族・親戚	61	69.3
	その他	1	1.2
長生きの秘訣	健康に気をつける	63	61.8
	家族が大事にしてくれる	63	61.8
	身体を動かす	63	61.8
	食べ物に気をつける	60	58.8
	規則的な生活	52	51.0
	生きがいがある	39	38.2
	趣味がある	34	33.3
	やる仕事がある	33	32.4
	楽天的な性格	29	28.5
	前向きな性格	32	31.4
	気分が若い	30	29.4
	その他	4	3.9

一方、現在の心境を 9 項目で尋ねた結果は表 3-4 のとおりである。82.1%（69 人）が「同年代の人に比べ元気な方」と回答し、ま

た 80.5%（66 人）が「生きた証を子や孫に残したいと思っている」。67.5%（56 人）は「いつまでの人に頼らずに生きていこう」と回答し、「もっと世の中の動きを知りたい」と 59.5%（47 人）、「自分の経験話を話しても良い」59.5%（46 人）とポジティブな回答をしている。一方で、「もう勉強することはない」と 6 割（61.5%）が思っている状況にあった。

表 3-4　現在の心境

		人数	割合 (%)
いつまでも人に頼らずに生きていこう	そう思う	56	67.5
	そう思わない	27	32.5
もう勉強することはない	そう思う	30	38.5
	そう思わない	48	61.5
以前よりまじめとは思わなくなった	そう思う	27	38.0
	そう思わない	44	62.0
同年代の人に比べて元気な方	そう思う	69	82.1
	そう思わない	15	17.9
もっと世の中の動きを知りたい	そう思う	47	59.5
	そう思わない	32	40.5
若い人に自分の経験を話しても良い	そう思う	46	60.5
	そう思わない	30	39.5
もっと新しい出会いや人間関係をつくりたい	そう思う	34	44.2
	そう思わない	43	55.8
何か出来ることで社会の役に立ちたい	そう思う	41	52.6
	そう思わない	37	47.4
生きた証を子や孫に残したい	そう思う	66	80.5
	そう思わない	16	19.5

日中の楽しみごとの回答は表 3-5 のとおりである。1 位は「テレビ･ラジオ」の 65.7%（67 人）で、次いで「散歩」44.1%（45 人）、「おしゃべり」43.1%（44 人）、「新聞」41.7%（43 人）が同じ程度に続き、「デイサービス」32.4%（33 人）、「読書」26.5%（27 人）、「趣味」25.5%（26 人）となり、楽しみごとの種類の多様さと、散歩、おしゃべりなど能動的な行為が上位にきている。

表 3-5　日中の楽しみごと

項　　目	人　数	割合 (%)
テレビラジオ	67	65.7
新聞	43	42.2
読書	27	26.5
ディサービス	33	32.4
病院	13	12.7
おしゃべり	44	43.1
散歩	45	44.1
スポーツ	17	16.7
カラオケ	11	10.8
講演会	10	9.8
趣味	26	25.5
その他	14	13.7

4）老い観

一方、老い観の回答は表 4 のとおりである。「老いた」感は 77 人（92.8%）でほとんどの人が感じているが、「孤独感」22 人（26.8%）、「時間経過の遅さ」26 人（32.1%）は 4 人に 1 人が感じている程度で、「無視された」3 人（3.8%）、「余計者」9 人（11.1%）と感じる人は少数派であった。また、超高齢期になっても老い感を全く感じていない人は 5 人（6.3%）であった。

表 4　老い観

項　　目			人数	割合 (%)
老い観肯定数	該当なし		5	6.3
	該当 1 つ		42	52.5
	該当 2 つ		17	21.3
	該当 3 つ		12	15
	該当 4 つ		2	2.5
	該当 5 つ		2	2.5
老い観の項目	孤独	感じる	22	26.8
	時間経過遅い	感じる	26	32.1
	無視される	感じる	3	3.8
	余計者	感じる	9	11.1
	老いた	感じる	77	92.8

5）「老年的超越」観の形成

「老年的超越」について 11 項目を尺度として、「はい」を 1 点、「いいえ」を 0 点として尋ねたところ、以下のような形成傾向が確認された。

① 認識状況

老年的超越尺度 11 項目の認識状況は表 5-1 のとおりである。高い認識の項目は、「若い頃より心が穏やかになった」が 82.7%（67 人）で、次いで「亡くなった両親への愛情が増してきた」71.8%（57 人）、「ささやかなことに幸せを感じる」70.4%（57 人）、「過去のことが最近のように感じる」64.6%（51 人）、「自分の全てを受け入れられる」61.7%（50 人）、「離れた兄弟･子どもを近くに感じる」57.5%（46 人）と続き、逆に極端に低い認識項目は「物やお金に対する興味がなくなった」26.8%（22 人）であった。次に低かったのは「物思いにふけることに幸せ」43.0%（34 人）、表面的な付き合いに関心がなくなった 48.1%（39 人）であった。

男女別で比較すると、5%水準で有意差があった項目は、「亡くなった両親への愛情が増す」で男性に有意に関連（P<0.026）し、「物やお金に興味がなくなった」は女性に有意に（P<0.026）関連していた。

表 5-1　老年的超越の認識状況

老年的超越項目	合計		内訳		Pearson のカイ 2 乗値	漸近有意確率 (両側)
	人数	割合 (%)	男 (%)	女 (%)		
表面的なことに関心がなくなった	39	48.1	36.7	54.7	2.516	0.113
物やお金に興味がなくなった＊	22	26.8	12.9	35.3	4.924	0.026
ささやかなことにも幸せを感じる	57	70.4	75.9	67.3	0.653	0.459
生かされていると感じる	42	52.5	58.6	49	0.683	0.488
自分の全てを受け入れられる	50	61.7	55.2	65.4	0.822	0.205
物思いにふけることに幸せ	34	43.0	48.1	40.4	0.437	0.365
過去のことが最近のように感じる	51	64.6	69	62	0.389	0.533
離れた兄弟・子どもを近くに感じる	46	57.5	62.1	54.9	0.389	0.533
亡くなった両親に愛情が増してきた＊	57	71.8	86.2	62.7	4.968	0.026
死に対する恐怖心がなくなった	44	54.3	66.7	47.1	2.927	0.109
若い頃より心が穏やかになった	67	82.7	86.7	80.4	0.52	0.471

＊は P ＜ 0.05

② 探索的因子分析

「老年的超越」11 項目の超越次元の因子分析を行うため、Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性を測定した（表 5-2）。その結果は 0.654 で、好ましいとされる 0.7 より少し低い値であったが、Bartlett の球面性検定の有意確率は 0.000 で、帰無仮説を棄却することができ、「KMO および Bartlett の検定」の結果から因子分析を行っても不都合はないという結果が得られた。

表 5-2　KMO および Bartlett の検定

項　　目		検定数値
Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性の測度		.654
Bartlett の球面性検定	近似カイ 2 乗	130.028
	自由度	36
	有意確率	.000

次に探索的因子分析（主成分分析・Kaiser の正規化を伴うバリマックス法）により 11 項目で因子分析を行ったところ、4 つの因子が抽出された。このうち、「ささやかなことにも幸せを感じる」「物思いにふける幸せ」の 2 項目が 1 因子として抽出されたが、この 2 項目では単独で超越次元を構成できないと判断し、この因子を除いた 9 項目について因子分析をした。結果、3 つの因子が抽出された（表 5-3）。

第 1 因子は、「過去の出来事が最近のように感じる」、「離れた兄弟を近くに感じる」、「何かに生かされている感じ」、「亡くなった両親への愛が増す」の 4 項目から構成され、これらは場所や時間を超えた次元として、「宇宙的超越」と名付けた。第 2 因子は、「若い頃に比べ心が穏やか」、「自分の全てを受け入れられる」の 2 項目から構成され、これは自己の再評価を示す次元として、「自己超越」と名付けた。第 3 因子は「物やお金への興味の減少」、「表面的なことへの関心の減少」、「死に対する恐怖心がなくなった」の 3 項目から構成され、生への執着を含めてこれまでの執着からの超越を表す次元として、「執着超越」と名付けた。累積寄与率は、第 1 因子 29.275%、第 2 因子 47.306%、第 3 因子 59.783%であった。

表 5-3　回転後の成分行列 a

	成分 1	成分 2	成分 3	共通性	分析 N
1 過去の出来事が最近のよう	.757			0.579	79
2 離れた兄弟を近くに感じる	.719			0.592	79
3 何かに生かされている感じ	.566			0.511	79
4 亡くなった両親の愛が増す	.524			0.674	79
5 若い頃に比べ心が穏やか		.802		0.646	79
6 自分の全てを受け入れられる		.611		0.539	79
7 物やお金への興味の減少			.819	0.713	79
8 表面的なことへの関心の減少			.706	0.553	79
9 死に対する恐怖心の減少			.453	0.571	79

因子抽出法：主成分分析
回転法：Kaiser の正規化を伴うバリマックス法
a 6 回の反復で回転が収束した。

③ 重回帰分析

次に探索的因子分析から導かれた 3 つの超越次元を従属変数とする重回帰分析を行った。独立変数は、「老年的超越」に関連するモデルとして、次の 8 つをもちいた。すなわち、「年齢」、「性別」（男性 1，女性は 0）の基本属性に加え、心理的な関連項目として、日々の「生活満足度」と居住空間に対する満足度である「愛着度」、そして、精神的自覚尺度である「老い感」、日常生活能力の状態を示す尺度である「行動能力」、また、自立度の尺度として「介護認定」、最後に、経済的な尺度として「暮らし向き」である。このモデルを独立変数として、それぞれを強制投入法による重回帰分析を行った結果は、「宇宙的超越」次元では、老い感（P<0.037）と行動能力（p<0.049）の 2 変数で負の関連が見られた。「執着超越」次元では「介護認定」（P<0.03）の 1 変数と負の関連が見られた。「自我超越」の次元では有意に関連する変数は見られなかった。

つまり、「宇宙的超越」は老い感が高くて、行動能力が高くなると低下すること、「執着超越」は自立度が低くなると低下することが明らかになったが、モデルとしての説明力は低いという結果であった。

表 5-4　老年的超越の重回帰分析

	宇宙的超越			自我超越			執着超越		
	標準化係数 ﾍﾞｰﾀ	t 値	有意確率	標準化係数 ﾍﾞｰﾀ	t 値	有意確率	標準化係数 ﾍﾞｰﾀ	t 値	有意確率
1 性別	-.132	-1.016	.315	.073	.540	.591	.117	.117	.288
2 年齢	-.183	-1.238	.221	.115	.745	.460	-081	-.648	.520
3 生活満足度	-.062	-.411	.683	.211	1.346	.184	141	1.120	.268
4 老い感合計	-.329	-2.138	.037	-.096	-.594	.555	-.085	-.656	.514
5 日常行動	-.371	-2.014	.049	.152	.790	.433	.027	.174	.863
6 愛着度	.059	.447	.657	.215	1.560	.125	-.162	1.461	.150
7 介護認定	-.106	-.595	.554	.094	.508	.614	-471	-3.161	.003
8 暮らし向き	-.232	-1.552	.127	-.014	-.091	.928	.120	.954	.345
	R =. 422[a]	R^2 =. 178		R =. 321	R^2 =. 103		R =. 648	R^2 =. 420	

４．考察

本稿では、ライフサイクルの第９段階に到達した超高齢者の老いの実態や意識を明らかにするなかから、Erikson らの示唆する超高齢期の適応課題とされる「老年的超越」の形成について、奄美群島の自宅居住超高齢者を対象とした調査から考察することであった。Erikson らの第９段階に至った超高齢者に対する評価は、既に触れたようにネガティブである。ライフサイクルの第８段階で出没した絶望は第９段階では切っても切れないものになり、失調要素が個人をいかに混乱させているかを論じている（1997）。Baltes らも同様で、第８段階の高齢者はサクセスフル・エイジングの成功を享受している世代と評価する一方で、超高齢期は機能的にも社会的にも人間として尊厳を保つことは困難としてサクセスフル・エイジングには否定的である（2002）。しかしながら、本研究の対象である奄美群島の超高齢者の実態からは、基本的信頼感に支えられた環境の中で日々の満足感や愛着度は高く、超高齢期に至っても前向きで多様な生き方が示され、これらが「老年的超越」の形成に関連することが明らかになった。

本考察では、分析枠組みとした普通の老いの過程にある超高齢者の理解、超高齢者の内面（精神）世界の老年的超越傾向について、Erikson や Baltes、Tornstam の論考と比較しながら明らかにすることとする。

1）奄美群島の超高齢者の老い意識

① 要求水準と満足感の関係

対象者の平均年齢は 90 歳で、居住年数も長く、全体の約４割は一人暮らしである。日常の生活経済面では 75％が普通以上の暮らし向きと答える。一方、約 75％が医者にかかっているが、自身の健康状態の評価は普通以上と 80％が答える。

これらの結果を全国調査と比較すると、85 歳以上高齢者の単独世帯の割合は男性 8.7％、女性の 11.5％（国民生活基礎調査･ 2005）であり､本調査の超高齢者は格段に一人暮らしの比率が高い。また、85 歳以上の健康意識の調査（国民生活基礎調査・2006）では健康意識が普通以上の回答は 54.9％ であり、これも本調査の超高齢者が上回る。生活意識面では、85 歳以上では調査がないので 65 歳以上の高齢者世帯（国民生活基礎調査・2006）と比べると、普通以上は 44.1％であり、これらと比較すると本調査の回答はいずれも全国平均に比べ高い値を示している。

本調査の回答と奄美群島の実際を比較してみると、奄美群島の概況（18 年度）によると、奄美の郡民所得は１人当たり 2000 千円で、鹿児島県の県民所得の 90.3％の水準で、一人当たりの国民所得との格差は 70.8％となっており、若干の自給自足体制があるとはいえ、けっして豊かな経済状況ではない。本調査の結果からは、超高齢者には客観的データとは異なる意識状況があることが推測される。つまり、超高齢者は、自らの物的水準要求を低くして満足感を高めていくという、補償のプロセスが機能していると考えられる。

② 家族への信頼と超高齢者の長生き観

佐藤（2003）は「日本の場合、自立が個人の最大の尊厳であるという考え方が欧米に比べ希薄なこともあり・・・日本人の多くがイメージする幸福な老いはそれよりも家族や友人とともに孤立しない生活である」と論じているが、奄美群島の超高齢者を物質的精神的に支えるのは家族の存在の大きさである。つまり、長生きをもっとも喜んでくれる人が「家族・親戚」であり、「自分自身」ではないのである。この回答は、まさしく自立を重んじる欧米のサクセスフル・エイジングの感覚からは導き出せない結果であろう。また、長生きの秘訣の筆頭に「家族が大事にしてくれる」をあげ、これは、「 健康に気をつける」､「身体を動かすこと」と同数であることからも、周囲との基本的信頼感のもとで、長生きの姿勢もポジティブであり、「寿命がくるまで」と「百歳は生きたい」という積極的意識となる。「もう十分生きた」という消極派は少数で、特に、「百歳は生きたい」と回答する人は健康状態が普通以上の健康に自信のある人である。

③ 地域の効用がもたらす多様な日々の生活

奄美群島の超高齢者の楽しみごとの回答からは在宅型余暇である「テレビ・ラジオ」は 65.7％でそう高くない。特徴的なのは精神的余暇活動として分類される「散歩」､「おしゃべり」､「趣味」などの過ごし方の比率の高さである。また意識面においても、「生きた証を子や孫に残したい」と８割以上が考え、「若い人に自分の経験談を話しても良い」､「もっと世の中の動きを知りたい」､「何か社会に役立ちたい」などの積極的な回答は５割を超えている。

老研式活動指標からみた行動能力に関しては、0-1 点の虚弱な層が２割いる反面、12-13 点と自立に全く問題のない層も２割と、超高齢期においても高齢期の２極化傾向（柴田，2005）と同じ傾向が明らかになった。また、１週間の生活行動では、洗濯、庭の手入れ、食事の支度、掃除、畑の世話、買い物など多様であった。反面、孫やひ孫の世話は低く、あまみ長寿･子宝調査報告（鹿児島県）では、高齢者は子や孫の世話に生きがいを感じている傾向があると報告されているが、超高齢者になると孫の関わりは薄くなることが本調査からは伺えた。

これらを総合的に見るとき、奄美群島の超高齢者の特徴は昔からの馴染みのある地域で暮らすことが効用となって、超高齢期の生活をポジティブに維持しているということである。それは居住年数の長さ、地域の愛着度の高さ、信頼の関係、子どもや地域との日常的な交流の豊かさである。これらは一人暮らしを成立させる要因ともなっている。また、家事、畑や庭の世話などの身体を動かす環境は健康に対する自信を生み、孤独感や余計者や無視されたというネガティブな感覚より、満足感と信頼感が前向きに生きる感覚を超高齢期においても保持させている。

高橋（1998）は住み慣れた地域の持つ力として、①日常生活リズムの継続性、②高齢者の生活圏域の整合性、③近隣がもたらす信頼感と安心感､④住民の小さな参加を結びつけやすい点をあげている。もともと地域は、「育ち、老いる場である」。自宅で居住する超高齢者のサクセスフル・エイジングに、地域の癒しの効用が大であることが本調査からも推察できる。

2）「老年的超越」形成傾向

① クロス分析

「老年的超越」尺度（11 項目）の回答から、今を生きる超高齢者の老いの内面が浮かびあがってきた。「物やお金に興味がなくなった」への肯定回答は 28.8％と 11 項目中で極端に低いことは、超高齢期になっても物やお金という世俗的なことから離れることはないということである。しかしそこには男女差があり、「物やお金に興味がなくなる」に女性の４割近くは肯定回答するが、男性は２割に

も満ないということである。2番目に低い「物思いにふけることに幸せを感じる」は44.4%であった。現実的には、「物思いにふける」ような孤独な時間は現代の超高齢者の生活では多数派ではないということが推測される。ここには男女差はない。

一方で70%以上の肯定認識を示したものは、「若いときと比べ心が穏やかになった」(86.7%)、「亡くなった両親への愛情が増した」(73.0)、「若いときには気づかなかったささやかなことにも幸せを感じる」(72.7%)であった。

また、「表面的な付き合いへの関心がなくなる」や「何かに生かされているという感じ」、「死に対する恐怖心がなくなった」は、超高齢期に至っても2人に1人が認識する程度ということであった。しかし男女差でみると、「亡くなった両親への愛情が増す」は男性(88.5%)に高く、5%水準で男性に有意に関連していた。反対に「表面的なつきあいへの関心がなくなる」は女性に高く(59.6%)、5%水準で女性に有意に関連していた。このような回答傾向からは、家意識を固守する男性、それから解放された女性というジェンダー差が理解できる。

② 探索的因子分析

一方、探索的因子分析からは、「宇宙的超越」「自我超越」「執着超越」3つの次元が抽出された。この結果は、Tornstam(2003)が北欧(スウェーデンやデンマーク)で行った量的調査から現れた老年的超越の構成次元や兆候と若干異なるものであった。つまり、「宇宙的超越」は同じ因子として抽出されたが、「自我超越(積極的な孤独)」と「社会と個人の関係(内的一貫性))とは若干違う兆候が現れたといえる。

しかしながら、これらの差異は、前述した自立を重んじる欧米の高齢者に比べ、家族の支えのなかで幸せを感じる日本の高齢者との価値観の差でもあり、自分の長生きは「自分自身」より「家族・親戚」が喜んでくれるという回答の高さにも現れており、その差異が理解できる。

③ 重回帰分析

「老年的超越」を構成する3つの次元と、性別、年齢、生活満足度、老い感、日常行動、愛着度、介護認定、暮らし向きの8つのモデルで、重回帰分析を行った結果からは有意に関連する変数は少なく、このモデルの有効性は低いという結果が導かれた。この結果からは、今後における尺度の精緻化が課題となった。

しかし、「宇宙的超越」は老い感が高く、行動能力が高くなると低下すること、「執着超越」は自立度の程度が低くなると低下するなどの関連は見られ、「老年的超越」は年齢とともに高次に至るというわけではないが、自立性の高さに関連し、「老年的超越」は「社会的離脱」とは異なることが確認されたといえる。

④ まとめ

最後に奄美群島の超高齢者の分析結果と、Eriksonらが最後の段階で記述した「英知と対をなす侮蔑」に関連して考察すると、Eriksonら(1997)は、高齢期は年を重ねるごとにますます「御用済み」となり、「途方にくれる」、「寄るべもなくなる」という状態の中で抱く感情と論じ、第9段階は新たに姿を現した無能性と依存性が暗い影を落とすと悲観的である。つまり、超高齢期におけるEriksonらの意識の中には、Tornstam(2005)が指摘する西洋の白人中産階級の高齢者意識の枠内にとどまり、自立、生産性を重んじる価値観から抜け出せなかったのでないかと、思考する。

これに対し本研究の対象である奄美群島の超高齢者は、そのような悲壮感は非常に低率で、むしろ彼らは自立より地域で、家族の繋がりに居ることでの幸せを感じている。その点では、岡本(2006)のいう生涯自立の概念でなく、日本型の依存型自立といえるものであろう。

本稿が鍵概念とした「老年的超越」は、これまでの効率性や生産性に重点を置く価値観や高齢者一般に対するエイジズムでは理解されなかった超高齢期の人生や活動について積極的な価値を与え、超高齢者の内面(精神)世界を捉えるに有効な概念であり、高齢者への新たな理解へつながるものと考える。

その点では、欧米におけるサクセスフル・エイジングの規定とは異なる形で、奄美群島の超高齢者はサクセスフル・エイジングを形成しており、その基底には「老年的超越」を内蔵する超高齢者の人生観の発達・変容があることが示唆される。

5. 本研究の限界と今後の課題

本研究の対象者は奄美群島という離島での、自宅居住者の超高齢者という限定した対象であり、また、前期高齢者との比較で捉えていない点で、一般化には限界があろう。

また、回収率が28.7%の結果について、超高齢者への郵送調査の妥当性が問われるであろう。筆者が超高齢者への郵送調査が可能であると判断したのは、90歳以上の超高齢者の半数は認知に問題がないというBaltesら(2002)の結果から、高回答率は望めないが可能と判断したものであった。実際、調査票の到着直後の回答が多く、その後途切れたことから、締め切り直前に再度の調査お礼状(督促状)を出すことで、さらに多くの超高齢者の意見が把握できたのではないかという課題が残った。

しかしながら、超高齢期という新たなライフステージを迎え、超高齢期のサクセスフル・エイジングを実現する環境づくりにおいて、奄美群島の超高齢者の老いの実態は我々に示唆的である。なぜなら、超高齢者のポジティブで前向きな老い意識は長年住み慣れた馴染みの環境で暮らすことが効用となって形成されていること、また地域や子どもとの絆があることによって基本的信頼感が形成され、超高齢期の生きる力となることが明らかにされたのである。

このことは、超高齢期のサクセスフル・エイジングの環境作りのために、超高齢者を地域にインクルージョンすること、地域レベルの自助、共助、公助のネットワークづくりをすすめ、地域の力、地域の癒しの効用を再生させること、このことが今後の超高齢社会形成の課題といえる。

むろんこれらは、都市部においても形成可能であることは筆者の調査からも導き出されている(冨澤, 2007)。我々は、今後進展する超高齢社会の課題解決に向け、住み慣れた地域で暮らすことの効用を再確認することが必要であると思考する。

岡本(2006)は、「本来介護保険制度は高齢者が在宅のまま住み慣れた地域社会のなかで、自由な生活を営みながら、必要なサービスを必要なときに活用し自立していくことを支援することが意図であり、目的であったはずである」と論じているのであるから。

注

(1)「Gerotranscendence」について、Tornstam理論を紹介した中

嶌･小田は､｢ジェロトランセンデンス｣と表記し､｢老いの超越｣と訳されているが、エリクソンの第９段階の発達課題としては「老年的超越」と訳されており、本研究では Gerotranscendence を「老年的超越」として使用するものである。

(2) 奄美群島は奄美大島、加計呂麻島、請島、与路島、喜界島、徳之島、沖永良部島、与論島の８島を指す。鹿児島市から東北端は 376km、南端は 592km に位置し、離島の中でも特に遠隔地にある。（奄美群島の概況＜平成 18 年版＞）

文　献

秋山弘子 (2002).｢日本の老年社会科学から欧米へ向けての発信｣『老年社会科学』第 22 巻第 3 号，338-342.

Braam AW. Bramsen I, van Tilburg TG, et al. (2006). Cosmic transcendence framework of meaning in life ; Patterns among older adultes in the Netherlands. *Journal of Gerontology, Social Sciences* 61B(3)121-128.

Baltes, PB. & Smith ,J (2002).New frontier in the future of aging ;From successful aging of the young old to the dilemmas of the fourth age. Gerontology, 49(2) : 123-135.

Erikson, EH. & Erikson, JM (1997). The Life Cycle Completed; A Review (Expanded Edition) . Norton& Company，New York ／（村瀬孝雄・近藤邦夫訳 : ライフサイクル、その完結＜増補版＞，みすず書房，2001 年).

岩佐一・権藤恭之･古名丈人ほか (2005).「身体的に自立した都市部在住超高齢者における認知機能の特徴；板橋区超高齢者悉皆訪問調査から (第 2 報)」『日本老年医学会雑誌』第 32 巻 2 号，214-220.

鹿児島県 (2004).『あまみ長寿・子宝調査概要報告書（平成 16 年 10 月 4 日)』.

鹿児島県大島支庁 (2006).『奄美群島の概況（平成 18 年版)』.

国立社会保障・人口問題研究所 (2006).『日本の将来推計』（平成 18 年 12 月推計）（http://wwww.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/Data/Popular2007/T02-09.html.）

厚生労働省 (2005).『平成 17 年国民生活基礎調査の概要』（(http://wwww.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hm/k-tyosa/k-tyosa05/ 1-2.html)

厚生労働省 (2006).『平成 18 年国民生活基礎調査の概要』（(http://wwww.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hm/k-tyosa/k-tyosa06/2-5.html

権藤恭之 (2002).「超高齢者の認知機能の特徴」『老年精神医学雑誌』第 13 巻第 8 号，906 － 911.

権藤恭之･古名丈人･小林江里香ほか (2005).「超高齢期における身体機能の低下と心理的適応；板橋区超高齢者悉皆訪問調査の結果から」『老年社会科学』第 27 巻第 3 号，227-337.

増井幸恵 (2008).「性格」権藤恭之編『朝倉心理学講座 15，高齢者心理学』朝倉書店，134-150.

内閣府政策統括官 (2007).「平成 19 年度エイジレス・ライフ実践者及び社会参加活動事例の選考結果について」（http://www8.cao.go.jp/kourei/kou-kei/h19ageless/index.html）：

中嶌康之･小田利勝 (2001).「サクセスフル・エイジングのもう一つの観点；ジェロトランセンデンス理論の考察」『神戸大学発達科学部研究紀要』．第 6 巻第 2 号，255-269.

小田利勝（2004）.『サクセスフル・エイジングの研究』学文社，1-34.

岡本民夫 (2006).「活力ある高齢者の台頭と対策」冨士谷あつ子・岡本民夫編『長寿時代を開くー生き生き市民の時代』ミネルヴァ書房，9-22.

嵯峨座晴夫 (2000).｢21 世紀の高齢社会と老年社会科学のフロンティアー大衆長寿と高齢者のライフスタイル」『老年社会科学』第 22 巻第 3 号，324-330.

佐藤眞一（2003）.「心理学的超高齢者研究の視点；P.B.Baltes の第４世代論と E.H.Erikson の第９段階の検討」『明治学院大学心理学紀要』第 13 巻，41-48.

柴田博 (2007).「サクセスフル・エイジング」柴田博，長田久雄，杉浦秀博編『老年学要論；老いを理解する』建帛社，55-61.

下仲順子 (2002).「超高齢者の人格特徴」『老年精神医学雑誌』第 13 巻第 8 号，912-920.

薗博明 (2004).「いま奄美は；日本復帰後の開発と自然・社会環境の変容」松本泰丈・田畑千秋編『現代のエスプリ別冊奄美復帰 50 年；ヤマトとナハのはざまで』至文堂 .

Tornstam,L(1989).Gero-transcendence；A meta-theoretical reformulation of the disengagement theory，*Aging: Clinical and Expermental Research*, 1(1)：55-63，Milan.

Tornstam,L(1999).Late-Life Transcendence；A new developmental perspective on aging; In Religion,belife, and spirituality in late life,eds. by Thomas LE, Eisendandler SA, Springer Publishing,New York.

Tornstam , L(2003). Gerotranscendence from young old age to old old age. Online publication from The Social Gerontology Group, Uppsala, Sweden. (http://www.soc.uu.se/publications/fulltext/gtransoldkld.pdf)

Tornstam, L(2005). Gerotranscendence；A Developmental Theory of Positive Aging. :Springer，New York.

高橋憲二 (1998).『厚生福祉』１月 10 日号.

高橋正実･井出訓（2004）.「スピリチュアリティーの意味；若･中･高齢者の 3 世代比較による霊性・精神性についての分析」『老年社会科学』第 26 巻第 3 号，296-307.

武田恵子・太湯好子 (2002).「日本人高齢者のスピリチュアリティ概念構造の検討」『川崎福祉学会』．第 16 巻第 1 号，53-66.

冨澤公子 (2007).「老年期の発達課題に関わる地域生協の役割；都市に居住する超高齢者に対するインタビューに基づいて」『福祉文化研究』第 16 号，31-42.